

脳卒中の作業療法

—支援技術から他職種連携・制度の利用まで

小林 隆 司

(首都大学東京大学院, 作業療法士)



習慣は、私たちの感覚を鈍らせ、物事の真実の姿を覆い隠すものだ、と述べたのはモンテーニュ(1533-1592)である。脳卒中は、OTが最も遭遇する機会の多い疾患の一つであることはいまでもない。しかし、それゆえ、OT個人のレベルでいえば、作業療法の習慣化やマンネリ化が起りやすい疾患であるともいえないだろうか。研修会に頻繁に参加して、常に新しい知見を取り入れていると自負する人もいるだろう。しかしながら、それが一定の手技やアプローチの枠を超えていないのなら、大きな視点でみるとそれもマンネリ化である。

そのようなマンネリ化から脱却するにはどうしたらいいだろうか。モンテーニュは、それにはまず判断を中止(エポケー)して、すべてを疑問形にしたまま考え続けることが必要だとしている。つまり、それぞれがよかれと思ってしている実践を一度棚上げにして、容易に判断を下さず、脳卒中の作業療法を吟味してみればいいのである。しかし、脳卒中の作業療法を吟味すると一口にいても、その領域は多岐に渡り、治療原理も

リーズニングもさまざまである。それを全部みて回るわけにもいかない。

そこで、そんなときに役に立ち、われわれの吟味に最も値するのが本書である。なぜならば、本書には、現代の脳卒中の作業療法のエッセンスがすべて盛り込まれているからである。

以下に簡単に、具体的の中身を紹介する。第1章の「総論」では、脳卒中を理解するための背景情報が網羅されている。ここで脳卒中の疫学や状態像がしっかりと把握できるだろう。第2章の「急性期から回復期の基礎」では、徒手的な誘導を使った運動再学習から始まり、セルフケアの支援や心理的支持の方法までが述べられている。ここでは、機能回復に資する作業療法介入について考えさせられるだろう。第3章の「急性期から回復期の個別性を重視した介入」では、高次脳機能障害への対応からスプリント、住宅改修等について記述されている。ここでは、事例を通じて、個人個人違ったオーダーメイドの作業療法の必要性について痛感させられるだろう。第4章の「生活期：生活の広

がりに向けて」には、生活行為向上マネジメントや地域での生活支援から、就労、スポーツや旅、そして終末期まで含まれている。ここで、地域包括ケアシステムが提唱される中で、OTがどのような役割を担い、どのような貢献が可能なのか理解できるだろう。第5章の「他職種・家族等との連携」では、連携と協業のあり方が示されている。ここで、効果的な連携の重要性を知ることは、これからの脳卒中の作業療法に多大な示唆を与えるだろう。

最後になるが、絶えず医学・医療が進歩している以上、それぞれの作業療法実践も常にイノベーションしていかなければならない。それがプロフェッショナルたる者の宿命である。日本の作業療法の到達点といっても過言ではない本書を、多くのOTが熟読し、明日からの実践に役立てていただきたいと思う。

B5判 276頁 3,800円+税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357